

学びの場としての図書館や研究所の調査と提案

阿部秀二郎¹⁾，岡田 大輔²⁾，藤本 則子³⁾

はじめに

インターネットが出現し、多くの資料が容易に確認、入手できるようになってから、研究者に必要とされる時間の利用方法と能力とは以前とは異なっている可能性を指摘できるだろう。資料を囲い込み独占する利益は薄れ、希少な先行研究を研究者独自の手腕で探し当てる職人的な能力よりも、幅広く公開された情報から合目的的に再構成する能力が重視されるようになってきていると推測できる。また情報の入手だけではなく、情報を公開するという点においても変わりつつあるだろう。研究結果を論文の形で公開し入手しやすくするだけではなく、採取した資料やデータを公開することで、世界中の研究者からコメントが得られ、共同研究に発展し、より研究が進むことなどが指摘されている。⁴⁾

もちろん、これらの変化は研究者にのみ当てはまるわけではなく、学生に与える影響も大きいと考えられる。学生がレポートを書く場合、かつては図書館などで本や論文を入手するしかなかったが、最近の学生はレポートにウェブページを多く引用する。その活動は一見主体的に見えても、学生はレポートの問いの答えそのものが書かれているウェブページを見つけるだけであったり、検索結果の上位三つ程度しか見ないため、導出した分析・結論は画一的なものが多いことがある。つまり情報を入手する段階では主体的であったとしても、レポートの内容に主体性が感じられないことがある。

知の創造を支える大学および大学図書館は、上の厄介な問題と格闘する必要がある。教員が学生に主体的に物事を考えさせ、オリジナリティのあるレポートを求めるのであれば、答えそのものがウェブページに載っているような課題を出すべきではない。そして、既存の図書館は、情報の検索・入手の手伝いをするだけでよかった。しかし文部科学省の審議でまとめられているように、⁵⁾ 大学図書館は「学習支援及び教育活動への直接の関与」や「研究活動に即した支援と知の生産への貢献」が期待されている。大学図書館がこの役割を果たすならば、大学および大学図書館は総体的に「主体的な学生を育てるために何ができるか」などを、より具体的に考える必要がある。⁶⁾

1) 和歌山大学経済学部准教授

2) 和歌山大学附属図書館特任助教

3) 和歌山大学経済学部特任助手（2014年3月）

4) 岡本〔2006〕は、研究者によるホームページ立ち上げの可能性について吟味しており、第1部2章では、インターネットが研究手段、研究対象、研究過程、研究成果に与える影響について考察し、研究過程への影響の大きさを指摘する。（24～38頁）

5) 科学技術・学術審議会ほか〔2010〕

大学教員、大学図書館（和歌山大学の場合「附属図書館」）の特任教員、学部内の研究所（和歌山大学の場合「経済研究所」）の特任助手（当時）とで、図書館は大学教育にどう関われるか、また、大学図書館や学部研究所が行う学習支援の可能性を探るため、2014年3月17日、立命館大学の図書館を訪ねた。立命館大学では、伝統的に開催されている経済学部の「ゼミ大会」に、図書館が関連することで、図書館の職員と大学の教員との協働がなされており、大学と大学図書館や学部研究所との学習支援の一つの可能性を有していると考えたからである。⁷⁾

結論から言えば、可能性の検証には至っていないが、図書館を訪れ、案内を受ける中で興味深い動向を把握でき、今後の協働の参考とできている。⁸⁾

本稿は、次のように構成される。

I. では、立命館大学図書館での調査結果を報告する。II. では、和歌山大学経済学部での少人数教育の現状をまとめる。III. では、和歌山大学附属図書館及び経済学部経済研究所における情報検索のあり方や授業での展開の可能性について提示する。

I. 立命館大学図書館での調査結果

1. びわこ・くさつキャンパス（BKC）の各種ルーム

立命館大学には、衣笠、びわこ・くさつ、朱雀の三つのキャンパスがあり、それぞれに図書館を有している。和歌山大学経済学部と最も類似すると考えられる経済学部や経営学部はびわこ・くさつキャンパス（以下BKC）に位置している。また、衣笠キャンパスには法学部・政策科学部が配置され（図表1）、朱雀キャンパスには、公務研究科、法務研究科、経営管理研究科など、主に専門職大学院が配置されている。

衣 笠	びわこ・くさつ
法学部	経済学部
産業社会学部	経営学部
国際関係学部	理工学部
政策科学部	情報理工学部
文学部	文理総合インスティテュート
映像学部	生命科学部
国際インスティテュート	薬学部
	スポーツ健康科学部

図表1 「衣笠、びわこ・くさつキャンパスの学部（立命館大学ホームページ⁹⁾から作成）」

- ✓ 6) すでに他大学では、図書館の職員による東北大学附属図書館での試みなどが行われている。（米澤[2007]）
- 7) 栗谷その他[2013]は、立命館大学経済学部において伝統的に行われていた学生のゼミ大会に、図書館が積極的に関わる可能性について論じている。
- 8) 本調査においては、立命館大学図書館サービス課の工藤純一様には、お忙しい中にも関わらず快く調査の申し出を受け入れていただき、かつご案内までお付き合いいただいたこと、この場を借りてお礼申し上げます。

和歌山大学経済学部には市場環境学科が存在し、市場環境学科には法律に関する授業科目も展開されていることを考えた場合、3キャンパス全ての図書館を調査するべきであろうが、「ゼミ大会」はBKCで行われた実践であり、今回はBKCの図書館を対象にした。

BKCは、主に理工学、情報理工学、生命科学、薬学を中心とした本を配置している「メディアセンター」と、経済学、経営学、スポーツ健康科学を中心とした本を配置している「メディアライブラリー」の2館がある。いずれの図書館にも、学生が主体的な学びの中心になるための仕掛けである「ぴあら」が設置されている。

学生の主体的な姿勢を引き出すための演出によって、主体的な学びを促すことができると考えられる。多くの大学教員がすでに行っているように、個々の授業では、双方向の授業を意識し学生に質問を行ったり、グループワークを行ったりするのも、演出の例である。しかし、それに加え、学生が能動的に学習を行うことを促す支援空間が各大学において特に2010年代以降設置されつつある。¹⁰⁾ この支援空間はラーニングコモンズと呼ばれている。

「ぴあら」もラーニングコモンズの典型である。ICT機器を管理する情報学センターと本を管理する図書館とのコラボレーションは、豊田[2012]によれば、2011年の衣笠キャンパスの図書館のPCの入れ替えをきっかけとして始まった。PCを担当する教育開発推進機構と、図書館とが双方の問題を解決する手段として作られたのが「ぴあら」である。

まず、物理的支援の例として、勾玉形の机とホワイトボードなどの、学生が議論をすることが促されるような設備が整っている(写真1 メディアセンター)。もちろん、ただ机と椅子を配置するだけではなく、メディアライブラリーでは無線LAN対応のノートPCが90台あり、奥には写真2に見られるように、20人程度までのプレゼンテーションのトレーニングを積むこともできる設備がある。さらに写真3のように、PCをディスプレイに接続しグループワークでの議論を行える空間が確保されている。さらに写真2・写真3の壁面はホワイトボードになっている。学生は本やPCから入手した情報を、PCを用いて即座に加工し、加工したものをホワイトボードに複数人で書き込む。その結果アイデアがひらめき、また論理を展開し、プレゼンテーションを集団で確認することができるようになっている。「ぴあら」には、このように様々に考えられた学びの工夫が用意されている。

しかし、「ぴあら」や図書館には、物理的な施設設備があるだけではない。人的な支援として「PCの使い方」だけではなく「学習支援」など、各種の学生スタッフが配置されている。写真4はメディアライブラリー館内にある、マルチメディアルームの一角にある「RAINBOW HIROBA」である。ここはICT機器の操作を支援する「レインボー・スタッフ」が待機している場所である。¹¹⁾

我々が訪問した際にも、多くの学生がディスプレイを用いるなどして「ぴあら」で学んで

✓ 9) 立命館大学[2014]

10) 加藤・小山内[2012]に、経緯や分析が詳しい。

いた。しかし残念なことに、我々が訪問した時期は春休み期間中であり、秋から冬にかけて行われるゼミ大会の学生の様子を見ることはできなかった。



写真1



写真2



写真3



写真4

2. 図書館と大学教員との関わり

次に、栗谷その他〔2013〕に記されているゼミ大会以外に、大学教員が図書館と積極的に関わっている状況について考慮する。まずメディアライブラリーの建物と、学部教員の研究室の建物は一体化しており、それぞれの階から図書館へ直接アプローチすることが可能である。そしてメディアライブラリー内には、メディアライブラリーが買うべき本を教員が選んだり、研究室に備える本を選んだりする空間も設定されている。その部屋には、本の間屋の在庫、つまり購入前の本が並べられており、教員はこの本はメディアライブラリーで買うべきと思えば、購入希望の本棚に本を移動することで基本的にその本はメディアライブラリーの蔵書として発注される。もちろん、研究室に備える本を受けとることもできる。つまり教員は図書館との関係を日常的に維持する中で、学生の動向であったり、図書館の蔵書であっ

- ✓ 11) 学生スタッフは立命館大学の伝統である。この他各種学生スタッフの存在と、彼らの大学FDへの活用は、木野〔2012〕第3章に詳しい。

たり、図書館のイベントであったりなどを把握することができることになる。図書館もそのような試みを教員に告知したり、動機付けを図ったりするような選択肢を獲得できる。

具体的に BKC において実現されている試みを二つ紹介しよう。

一つ目は特定の教員の推薦書のコーナーである（写真 5）。推薦した教員の名前が示されていることで、本から教員へまたは教員から本へという情報の流れを通じて、教員や本の背景に存在する学問への興味を抱く学生は多いと考えられる。

また、「ぴあら」設立時からの試みではある、大学院学生だけではなく、教員による学習支援も存在する。それが写真 6 に見ることができる、「駆け込み寺」である。これは教員が一定の時間ぴあらに滞在し、学生の質問に回答し学生に示唆を与えることを目的としたものである。しかし、教員は滞在が強制されているわけではなく、かつ自分の研究室をとび出し「ぴあら」で研究しているという認識を有して、学生がいない間にはそこで研究している場合もあることから、「オフィスアワーを図書館で行っている」程度に理解すれば良さそうである。¹²⁾



写真 5

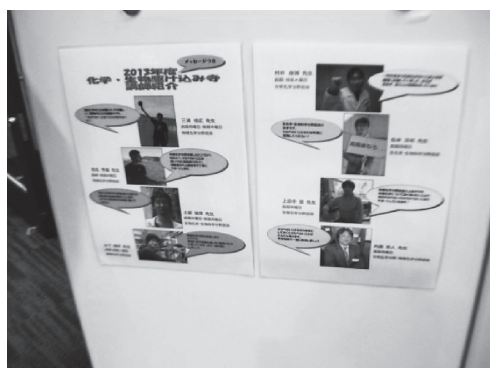


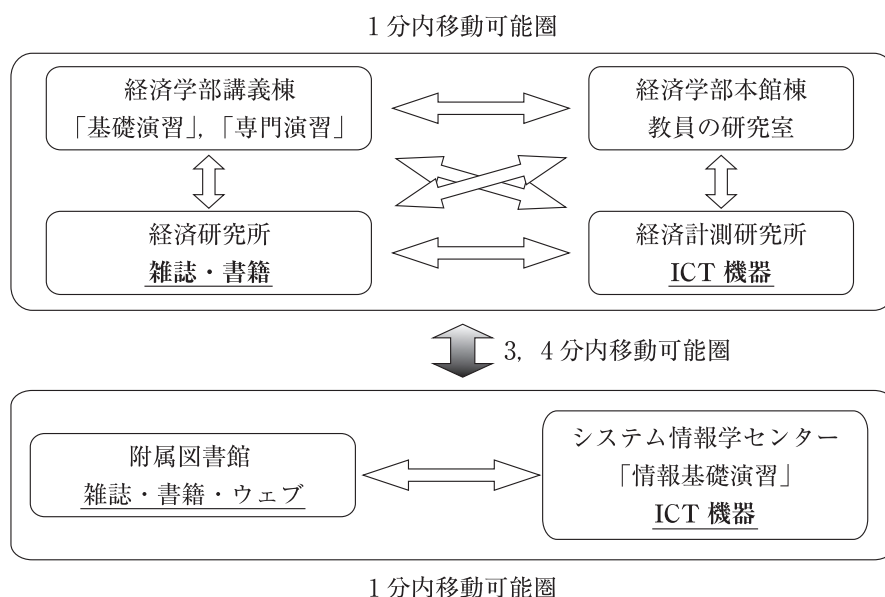
写真 6

II. 和歌山大学経済学部の授業展開等の現状

I. で指摘したように、図書館の ICT 機器と本とのコラボレーションが現在の立命館大学の図書館のベースになっていると指摘できる。本経済学部の状況について図表 2 に簡単にまとめた。

経済学部では 1 年次前期少人数教育は、基礎演習 I によって展開されている。そして基礎演習 I は経済学部講義棟で行われ、情報基礎演習はシステム情報学センターで行われる。二科目を通じてこの段階では図書館で論文などの専門的な資料を学生が自ら判断と入手するのは難しく、読み書き、コミュニケーション、プレゼンテーションの能力向上のイロハを提示する段階である。ICT 機器操作のリテラシーも最初の出発点としてイロハを修得するという

12) 他にも工藤様から興味あるお話をいただいたが、様々な空間的工夫はここでは説明しない。



図表2 「少人数教育で経済学部内または経済学部と関係ある施設」

段階である。

1年生後期の基礎演習Ⅱにおいては、新書程度の本を要約し、問題を設定し、その問題解決のためのアプローチを学ぶことになる。そして基礎演習Ⅱはやはり経済学部講義棟で行われる。ICT機器の操作については経済計測研究所やシステム情報学センターを利用することになる。図書館を教室にして行う方法もある（マルチルーム等で行う）が、図書館内にPC教室はなく、図書館1階のPCを用いて履修者全員が文献検索など授業を日常的に行うことは難しい。ICT機器を利用しながら奥へという段取りを考えると、やはり附属図書館におけるPC等の設置数の増加や授業と連動したICT機器の利用方法の模索が重要である。システム情報学センターを中心に学習する方法もあり得るが、システム情報学センターの教室にもそれほど余裕はなく、図書館に隣接しているとはいえ、図書館の本と併用して学習・調査するには手間がかかる。また経済学部には経済研究所があることから、経済計測研究所のPCと経済研究所での論文・書籍を利用するという可能性がある。しかし二つの点で問題がある。一つ目は基礎演習Ⅱの受講生は約20名であり、経済研究所で20名が同時に本等を探すのは物理的に難しい。二つ目は経済研究所は紀要や雑誌論文などのレベルの本を多く所蔵し、新書を教材として選んでいる1年次後半の学生にいきなり高度な論文を読ませることはできない。

したがって大学1年生から2年生までの段階では、ICT機器を頻繁に利用しながら問題設定等を行うことから、ICT機器に接しやすい経済計測研究所かシステム情報学センターを教室として利用する傾向がある。

他方で、現状において3年生からの専門演習も基本的には経済学部棟で行われる。しかしこの段階においては図書館そしてより専門的な研究蓄積を有する経済研究所での書籍・論文検索が好ましい。ゼミ学生数は10名程度であって、経済研究所では現在のところやはり全員で討論を行う空間的余裕はない。先に述べた通り、現状図書館でICT機器を利用した授業を行うことは難しい。

Ⅲ. 和歌山大学附属図書館及び経済学部経済研究所での情報検索や授業方法の考え方

1. 和歌山大学附属図書館における情報検索や授業方法の考え方

知的創造に関連する情報として、インターネット上の各種情報は必要であり重要である。また高度な知的創造物を維持するという「図書館の真髄」に触れることは、入学前までの与えられる教育に慣れている学生にとって容易ではないだろう。したがって入学直後の学生は、インターネットに容易にアクセスできることが重要である。その点のみで考慮すれば、システム情報学センターで十分であるかもしれない。

しかしインプットした情報を知的創造物としてアウトプットするには、複数の情報源へのアクセスとある程度の検索の方法の知識が不可欠である。つまり学生は授業でのレポートを提出しなければならない段階において、情報源としてインターネットのみではなく、書籍・論文も利用する状況へと進んでいく必要がある。したがって社会科学系の1年生後半からの学生は、システム情報学センターでは不十分で、図書館も必要となるであろう。そして図書館でのトレーニングを積み重ねることで知的創造は洗練されていくことになる。

このトレーニングは大学教員が授業もしくは授業外で行うか、図書館の教職員が授業もしくは授業外で行うか、学生同士で行うかという三つの可能性が存在する。最後の学生同士で行うものはピア・ラーニングと呼んでよいものであろうが、同学年でピアでのトレーニングは難しいことから、大学院学生や学部上級生によるサポートを得ながらトレーニングすることが望ましいと考えられる。知的創造ができる学生の創出は、大学教員もしくは図書館の教職員に依存することになるだろう。

授業においてはすでに各学部の教員が、場合によっては図書館の教員と協力し、図書館のマルチルームやメディアルーム等を利用しこのトレーニングを進めていると言ってよいであろう。学生は図書館において、壁が全面のホワイトボードの部屋で意欲を高めるだけではなく、本とインターネットによる情報を同時に活用することで、さまざまな情報を比較することの必要性を意識していると考えられる。したがってこれらのこの試みの利益を大学内において共有することによって、このトレーニングの展開を拡充することが望まれる。他方で、教員は図書館への移動に手間がかかるという不利益も認識しているはずである。さらに、このような学生の主体性を期待する授業では、講義型の授業に比べ学生に伝えられる知識の量は減ると予想されることから、成績評価や単位のあり方について困惑を感じる教員も存在す

る。これらの点をどのように改善すべきかは図書館のみならずFDの部署も関係しながら模索することが必要である。

図書館教職員も上の試みに関連することができればより効果は高くなるものと思われる。具体的にはこれらの授業に図書館教職員も参加するなどが考えられる。このことにより教員と図書館教職員との間で、教育に必要な情報や授業の中身、つまり教育目標を相談し議論する可能性が指摘できる。¹³⁾

授業以外においては、立命館大学で実施しているように、教員が一定時間を割り、図書館で学生からの知的創造に関する質問に回答するなどの方法も模索できる。¹⁴⁾ オフィスアワーを図書館で行うことは十分可能であると考ええる。

2. 経済学部経済研究所での情報検索手段や授業方法の考え方

経済研究所は、既に指摘したように社会科学系論文を中心に揃えている。したがって専門的な学習が進む段階（例えば2年生後半程度）からの学生が知的創造活動に利用できる空間であることが望ましい。初年次の学習の入り口としてはICT機器を中心に活用する研究方法であっても、より高度で独創的な研究のためには、インターネットの情報に基づきピアで議論する授業ではなく、活字情報を掘り起こしていく作業が重要になる。こうなると図書館の1階でのラーニングスペースから2階以上の奥へ、そして経済学部では経済計測研究所から経済研究所へと、学生の過ごす時間が増加することになる。¹⁵⁾ しかし既存の経済研究所ではインターネットにはアクセスできないので、通路の逆側に存在する経済計測研究所でCiNiiや国立国会図書館、和歌山大学附属図書館での情報を確認して、経済研究所での具

13) 例えば新聞記事データベースについて、和歌山大学附属図書館は朝日新聞と日本経済新聞しか契約していない。他の新聞は縮刷版を用いることになる。他の大手新聞記事も閲覧できるような契約可能性を模索するなどの議論もあり得る。一方で図書館の情報について利用できていない、知り得ていない情報へのアクセスを教員は図書館教職員から享受する可能性もある。

14) 和歌山大学附属図書館では、著者の岡田がすでに行っている。

15) この点においては、I. で視察した立命館大学でも現状はなかなか難しいと言えよう。下にBKCと衣笠キャンパスとの、図書館来館者数と本の貸出数との比較を提示する。それぞれのキャンパスの特徴があるので、一概には言えないが、図書館利用率は大きく変化しないのに、貸出率には大きな差がある。図書館での情報活用において奥の独創的な世界へと進もうとする傾向は経済学部・経営学部ではまだ弱いように感じられる。

図書館利用率（注1）	
衣笠	びわこ・くさつ
58.0	60.8

注1：図書館利用者数 / 在籍者数

図書館利用率（注2）	
衣笠	びわこ・くさつ
18.8	10.2

注2：貸出冊数 / 在籍者数

下の立命館大学図書館基礎データのページから資料をダウンロードして、著者が作成。キャンパスには理系学生の利用部分も含む。

(http://www.ritsumeit.ac.jp/library/guide/about/guide_stats.html/ 20140601 アクセス)

体的な論文調査作業に取り掛かることになる。またトレーニングという面では、その作業をチェックしアドバイスする人が必要である。しかし、経済計測研究所や経済研究所は授業を行うには狭量であるために、教員は経済学部講義棟にある演習室で待ち構えて、学生は経済計測研究所で情報を入手し、経済研究所で論文を入手し、講義棟にある演習室に持ち帰るという状況にもなってしまう。

図書館と同様に、現状の利益をも把握しながら、不利益または要望を確認する中で、可能な対応を求めて行くことが望ましい。¹⁶⁾

結びにかえて

本稿では、立命館大学図書館での調査を踏まえて、和歌山大学経済学部の既存の少人数教育という授業を振り返り、附属図書館や経済研究所の利用方法についての提案を試みた。もちろん社会科学系のみならず、自然科学系においてももちろん知的創造は必要であり、その活動を支えるべく情報検索手段や空間の議論も重要である。しかし本稿ではその部分は所与として、社会科学系の知的創造を模索した。また、知的創造を模索する試みにおける授業内容の吟味、あるいは授業以外で「何かできることがないか」についての吟味などは手をつけられていない。今後の課題としたい。

また、本稿で展開した提案を進捗させるためには、知的創造に結び付くための学生の能力形成を何らかの方法で把握する必要があるだろう。今後の課題である。

参考文献

- 加藤・小山内 [2012]: 加藤・小山内編著『ラーニング・コモンズ: 大学図書館の新しい形』(2012年, 勁草書房)
- 科学技術・学術審議会ほか [2010]: 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会「大学図書館の整備について(審議のまとめ) - 変革する大学にあって求められる大学図書館像 -」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm, 20140601 アクセス)
- 木野 [2012]: 木野茂『大学を変える, 学生を変える』(2012年, ナカニシヤ出版)
- 栗谷その他 [2013]: 栗谷・木村・武山・臼井「社会科学系学部の学びの質向上に寄与する図書館の新たな学習支援プログラムの開発: BKC 社会科学系学部(経済学部・経営学部)のゼミナール大会に注目して社会科学系学部の学びの質向上に寄与する図書館の新たな学習支援プログラムの開発: BKC 社会科学系学部(経済学部・経営学部)のゼミナール大会に注目して」『大学行政研究』(8号, 2013年, 立命館大学大学行政・研修センター)
- ニコラス・カー [2010]: ニコラス・カー『ネットバカ』(篠儀訳, 2010年, 青土社)
- 岡本 [2006]: 岡本真『これからホームページをつくる研究者のために』(2006年, 築地書館)
- 立命館大学 [2014]: 立命館大学「学部・大学院 - 立命館大学」(http://www.ritsumeij.jp/faculty/b00_j.html ,

16) 例えば, 論文情報を確認できるインターネットを利用できる端末を経済研究所でも確保したり, 場合によっては演習室として利用できる空間を準備するなど。

20140601 アクセス)

豊田 [2012]: 豊田哲也「大学図書館における学習支援を考える～立命館大学図書館ラーニングコモンズ「BKC びあら」事例紹介～」(国際図書館協力シンポジウム報告, 私立大学図書館ホームページ<<http://www.jaspul.org/collegium/cat4/>>よりダウンロード, 20140601)

辻 [2013]: 辻元「ICTと教育について」(<http://agora-web.jp/archives/1560549.html>, 20140601 アクセス)

J. L. Vigdor and H. F. Ladd [2010]: SCALING THE DIGITAL DIVIDE: HOME COMPUTER TECHNOLOGY AND STUDENT ACHIEVEMENT, NBER WORKING PAPER SERIES, (NATIONAL BUREAU OF ECONOMIC RESEARCH, 16078, June, 2010)

米澤 [2007]: 米澤誠「レポート作成を起点とした情報リテラシー教育の試み」『医学図書館』(54 (2), 2007 年, 日本医学図書館協会)